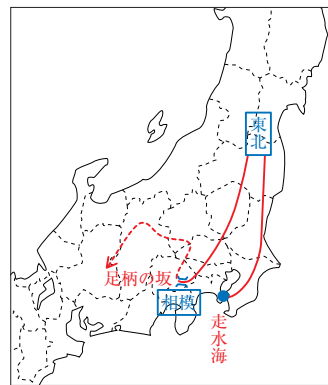




再生

おとたちはなひめのこと 弟橘比売命



やまとけるのみこと
日本武尊が、相模国（神奈川県）から走水海を渡り、上総国（千葉県）へお進みになるときのことでした。その海の神が怒って、静かだった波が急に荒立ち、尊たちの乗った船は渦に巻き込まれ、今にも飲み込まれそうになってしまいました。

そこで後の弟橘比売命がおっしゃいました。「私が尊さまの身代わりになって、海の神の怒りを鎮めるため海に入ります。尊さまは、東国平定の任務を立派にやりとげ、天皇さまにご報告なさいます。」別れのことばを述べた後、后は菅笠八重、皮笠八重、絹笠八重を波の上に敷き、その上に下りられました。

すると、今まで荒れ狂っていた海も、うそのように穏やかになり、船は無事に進むことができました。この時、弟橘比売命は「相模の野に燃える火の、炎の中に立ち、私のことを心配し、何度も何度も呼びかけて下さったあなたさま……。」とお歌いになりました。七日の後、尊は海岸に流れ着いた後の櫛を見つけ、御陵を造って埋葬されました。

東国を平定した尊は、帰りに足柄の坂の上から東の方を振り返り、「吾妻 はや（ああ、わが妻よ）」と三度叫んで悲しみました。そこで、東国を「あずま」といいます。

考えてみよう

○ふところに飛び込む

○平定

○悲しみ